

EXTERNAL PREPARATION FOR SKIN

特許公報番号 JP63022506 (A)
公報発行日 1988-01-30
発明者: KAWAJIRI YASUHARU; NAKAO YOSHIHARU; SHIMANO FUSAKO; WACHI YOJI
出願人 SHISEIDO CO LTD
分類:
— 国際: A61K8/96; A61K8/00; A61K8/40; A61K8/49; A61K8/97; A61K31/405; A61K47/46;
A61Q5/00; A61Q19/00; A61K8/00; A61K8/30; A61K8/96; A61K31/403; A61K47/46;
A61Q5/00; A61Q19/00; (IPC1-7): A61K7/00; A61K31/405; A61K47/00
— 欧州: A61Q5/00F; A61K8/97; A61Q19/00
出願番号 JP19860165399 19860714
優先権主張番号: JP19860165399 19860714

要約 JP 63022506 (A)

PURPOSE: An external preparation for skin especially effective for preventing, remedying and treating pimples, effectively preventing dandruff by using it on the scalp, obtained by blending an anti-inflammatory drug with herbaceous peony, peony or an extract thereof. CONSTITUTION: (B) One or more selected from herbaceous peony, peony and an extract thereof and (B) one or more anti-inflammatory drugs selected from glycyrrhizic acid, allantoin, indomethacin and an derivative thereof as active ingredients are blended to give an external preparation for skin having improved mildly suppressing effects on inflammation, penetrating to the skin extremely well, providing neither irritation nor hormone-like side effects at all and especially effective for preventing, remedying and treating pimples and effective for preventing dandruff.; The amount of the component A is \geq about 0.005wt% in case of powder or essence - preferably to about 10wt% calculated as dried residue based on the total amounts of the composition and the amount of the component B is 0.001-20wt% preferably 0.01-10wt%.

esp@cenet データベースから供給されたデータ — Worldwide

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭63-22506

⑪ Int.Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑬ 公開 昭和63年(1988)1月30日

A 61 K

7/00
31/405
47/00

3 4 6

7306-4C

7330-4C

E-6742-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全5頁)

⑭ 発明の名称 皮膚外用剤

⑯ 特 願 昭61-165399

⑰ 出 願 昭61(1986)7月14日

⑱ 発 明 者 川 尻 康 晴 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑲ 発 明 者 中 尾 芳 治 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

⑳ 発 明 者 島 野 房 子 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

㉑ 発 明 者 和 知 陽 二 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内

㉒ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明細書

1. 発明の名称

皮膚外用剤

2. 特許請求の範囲

(1) シャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物からなる群から選ばれた1種又は2種以上と、抗炎症剤とを配合することを特徴とする皮膚外用剤。

(2) 抗炎症剤がグリチルリチン酸、アラントイン、インドメタシンまたはそれらの誘導体である特許請求の範囲第1項記載の皮膚外用剤。

3. 発明の詳細な説明

[産業上の利用分野]

本発明は皮膚外用剤に関する。更に詳しくは、シャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物からなる群から選ばれた1種または2種以上と、たとえばグリチルリチン酸、アラントイン、インドメタシンおよびそれらの誘導体などの抗炎症剤から選ばれた1種または2種以上と

を配合することを特徴とする皮膚外用剤に関するもので、特にニキビの予防、治療、処置に有効に働き、また、頭皮に使用してフケを有効に予防することができる。

[従来の技術]

ニキビは主として思春期に発現する皮膚疾患で病名を尋常性痤瘡といい、臨床的には“毛嚢脂腺系を中心に毛孔に起こる慢性的炎症性変化”と定義されている。

ニキビの病因は現在まだ明らかではなく、種々の要因が複雑にからみあっている皮膚疾患であるが一般には、皮脂分泌過剰、毛嚢角化、毛嚢内細菌が重要な役割を果たしていると考えられている。

以上のような要因からニキビが発生し、病変が進むと皮脂腺の閉塞がみられ、さらにF.F.Aの周囲結合組織への益出による炎症が認められる。

したがってニキビ治療外用薬の1つとして抗炎症効果をもつ薬剤が使用されているが、抗

炎症効果を有し、かつニキビ治療効果のある薬剤は数種にすぎず、また効果の面においても十分とは言いがたく、治療面でも満足できるものではない。

〔発明が解決しようとする問題点〕

本発明者らは、従来の抗炎症剤の効果を皮膚上で増大させ、特にニキビの予防、治療、処置に有効に働き、また、頭皮に使用してフケを有効に予防することができるような化合物を研究していたところ、生薬であるシャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物から選ばれた1種又は2種以上と、たとえばグリチルリチン酸、アラントイン、インドメタシンおよびそれらの誘導体などの抗炎症剤から選ばれた1種または2種以上とを有効成分として配合することを特徴とする皮膚外用剤が、この目的を達成できることを見いだして、本発明を完成した。

〔問題点を解決するための手段〕

すなわち本発明は、シャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物からなる群から選ばれた1

種又は2種以上と、抗炎症剤からなる群から選ばれた1種又は2種以上とを配合することを特徴とする皮膚外用剤である。かかる皮膚外用剤は、特にニキビの予防、治療、処置に有効に働き、また頭皮に使用してフケを有効に予防することができる

以下本発明の構成について詳述する。

本発明においては、シャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物からなる群から選ばれ任意の1種または2種以上を用いる。シャクヤクは、ボタン科(Paeoniaceae)シャクヤクの根、またボタンビは同じくボタン科のボタンの根皮を乾燥したものである。シャクヤクまたはボタンビの抽出物は、上記シャクヤクの根またはボタンビの根末を水もしくは水性アルコール、たとえばエタノールを用い、通常15～25℃で抽出処理して得られる。

配合量は末、エキス(抽出溶媒を留去した残分)とともに全組成中におおむね0.005% (重量%)以上配合する。配合量の上限は特に限定

するものではないが着色等の商品価値の観点から乾燥残分として合計で約10%まで配合するのが好ましい。

また本発明に用いられる抗炎症剤としてはグリチルレチン酸、グリチルリチン酸、アラントイン、イブシロンアミノカブロン酸、フルフェナム酸ブチル、アズレン、カンファー、塩化亜鉛、亜鉛華、メントール、インドメタシン、イブプロフェンピコノール、メフェナム酸ならびにそれらの誘導体等が挙げられる。とくにグリチルリチン酸、アラントイン、インドメタシンが好ましい。

本発明においてはこれらの抗炎症剤から選ばれた任意の1種または2種以上が用いられる。

配合量としては0.001%以上20%以下であるが、好ましくは、0.01%以上10%以下である。

本発明の皮膚外用剤には、シャクヤク、ボタンビおよびそれらの抽出物と、たとえばグリチルリチン酸、アラントイン、インドメタシンな

どの抗炎症剤のほかに、角質剥離剤、ビタミン剤、抗菌剤および剤形によっても異なるが、油分、界面活性剤、水、エタノール、保湿剤、増粘剤、香料、色素等を本発明の効果を損なわない範囲で適宜配合することができる。

本発明の皮膚外用剤の剤形は、クリーム、軟膏、ローション、トニック等外皮に適用できる性状のものであればいずれでも良い。

〔発明の効果〕

本発明による皮膚外用剤は炎症を温和に抑制する効果に優れている。さらに非常に良く皮膚に浸透し、刺激やホルモン用副作用を全く与えず、特にニキビの予防、治療、処置に有効に働き、また頭皮に使用してフケを有効に予防することができる。

〔実施例および発明の効果〕

実施例1 化粧水

ソルビトール (70%)	3.0 g
グリセリン	5.0 g
グリチルリチン酸	0.2 g

水	69.0 g
これらの成分を混合溶解し、これに、	
アラントイン	0.1 g
シャクヤクエキス	1.0 g
ボタンビエキス	0.2 g
イオウ	1.0 g
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油誘導体	

0.5 g

エタノール 20.0 g

香料 適量

の混合溶液を攪拌しながら加えて均一な溶液として化粧水を得る。

実施例2 クリーム

ミツロウ	11.0 g
パラフィンワックス	6.0 g
ラノリン	3.0 g
イソプロピルミリステート	6.0 g
スクワラン	8.0 g
流動パラフィン	27.0 g

シャクヤクエキス	0.05 g
サリチル酸	1.55 g
インドメタシン	2.0 g
ポリオキシエチレンソルビタンモノステアレート	1.5 g
ソルビタンモノステアレート	4.2 g
防腐剤	適量

この成分を混合し、約75℃で加熱し溶解し、これに約75℃で、加熱した、

プロピレングリコール 2.0 g

ホウ砂 0.7 g

水 27.0 g

の混合液を攪拌しながら加え、冷却し、55℃で香料を適量加え、45℃まで攪拌をつづけ、放置してクリームを得る。

実施例3 ヘアトニック

エタノール	55.0 g
ヒノキチオール	0.1 g
メフェナム酸	0.1 g
メントール	0.1 g

ニコールHCO-60	1.0 g
香料	適量

を室温下、溶解してアルコール相を得た。

シャクヤクエキス 0.7 g

精製水 42.0 g

グリセリン 1.0 g

色素 適量

の混合液を加熱下に溶解し冷却し水相を得た。水相に前記アルコール相を加え可溶化してヘアトニックを得た。

実施例4 軟膏

固体パラフィン	10.0 g
ビースワックス	10.0 g
スクワラン	10.0 g
シャクヤクエキス	1.0 g
レゾルシン	0.5 g
亜鉛華	0.5 g
香料	適量
ワセリン	68.0 g

上記成分を混合し、混合物を80℃に加熱溶解した後、攪拌冷却を行い、軟膏を得た。

さらに臨床例を挙げて本発明の効果を詳しく説明する。

(使用薬剤)

下記処方、製造法で得たローションタイプの皮膚外用剤を使用した。

シャクヤクエキス	1.0 g
P.O.E.(60%)硬化ヒマシ油	2.0 g
グリセリン	10.0 g
ジプロピレングリコール	10.0 g
1,3-ブチレングリコール	5.0 g
ポリエチレングリコール1500	5.0 g
以上を60℃で加熱溶解する。これに	
グリチルリチン酸	1.0 g
セチルイソオクタネート	10.0 g
スクワラン	5.0 g
メチルバラベン	1.0 g

を同じく60℃に加熱溶解したものを添加混合し、ホモミキサーで処理をしてゲルを作る。

次にこのゲルに
 カルボキシビニルポリマー 0.3g
 ヘキサメタリン酸ソーダ 0.08g
 を、
 イオン交換水 10.5g
 に溶解せしめたものを徐添加しホモミキサーで
 分散した後、
 水酸化カリウム 0.12g
 を、
 イオン交換水 39.0g
 に溶解したものを添加混合し、ホモミキサーで
 乳化してローションタイプの皮膚外用剤を得
 た。

なお対照薬剤としてシャクヤク抽出エキスの
 みまたはグリチルリチン酸のみ配合した外用剤
 を用いた。なお補正はイオン交換水で行った。

症例No. 1～10 グリチルリチン酸のみ配
 合。

症例No. 11～20 シャクヤク抽出エキスの
 み配合。

り有用(++)、やや有用(+)、無効(±)と
 判定した。

症例No. 21～30 グリチルリチン酸+シャ
 クヤク抽出エキス配合。

以上男女計30名に約1カ月使用させた。

(使用方法)

化粧石鹸を用いて顔をよく洗浄した後、皮
 疹の上にのみ、前記したローションタイプの皮
 膚外用剤を1日に1～3回塗布せしめた。

(観察項目および観察日)

面皰、丘疹、膿疱の3症状について観察し、
 その個々の所見の程度をを総合して尋常性痤瘡
 の重篤度を、重症、中等症、軽症の3段階に分
 けた。経過観察は、治療前、治療1週間後、2
 週間後、3週間後、4週間後の各回に行った。

(全般改善度)

使用前に比較して使用薬剤による症状の改善
 度、著しく軽快(++)、かなり軽快(++)、や
 や軽快(+)、不変(±)、増悪(-)の5段
 階に分けた。

(有用性)

全般改善度から、きわめて有用(+++)、かな

(結果)

症例 番号	年令	性	重篤度	全般改善度	有用性
				1 2 3 4	
1	20	女	中	+ ± ± ±	±
2	23	女	中	- - ± ±	±
3	21	女	中	± ± + +	+
4	15	女	中	± ± + +	+
5	17	女	中	+ + + +	+
6	19	男	重	- ± ± ±	±
7	21	男	軽	± + + ++	++
8	25	女	軽	± ± + +	+
9	26	女	中	± + ± ±	±
10	15	女	中	± ± ± ±	±
11	20	女	中	± ± ± ±	±
12	21	女	中	- - - ±	±
13	23	男	中	± - - ±	±
14	25	女	軽	± + + +	+
15	26	女	軽	- + + +	+

特開昭63-22506 (5)

症例 番号	年令	性	重篤度	全般改善度				有 用 性
				1	2	3	4	
16	15	女	中	+	+	±	±	±
17	15	女	中	±	-	±	+	+
18	17	男	中	±	-	+	+	+
19	18	女	中	-	±	±	±	±
20	19	女	重	-	±	±	±	±
21	21	女	中	+	+	++	++	++
22	21	女	中	±	++	+	+	+
23	22	男	中	+	++	++	++	++
24	25	女	軽	+	++	++	++	++
25	19	男	中	+	+	+	+	+
26	19	女	軽	+	±	+	++	++
27	22	女	中	±	±	+	+	+
28	25	女	中	+	+	++	++	++
29	20	女	重	+	±	+	+	+
30	16	女	軽	±	+	++	++	++

男6名、女24名計30名の臨床テスト結果は、グリチルリチン酸配合外用剤使用10名中++(かなり有用)が1名(10%)、+(やや有用)が4名(40%)、±(無効)が5名(50%)、シャクヤク抽出物のみ配合外用剤使用10名中+(やや有用)が4名(40%)、±(無効)が6名(60%)、グリチルリチン酸+シャクヤク抽出物配合外用剤使用10名中++(きわめて有用)が3名(30%)、++(かなり有用)が3名(30%)、+(やや有用)が4名(40%)であり、本発明のニキビ治療効果が立証された。

特許出願人 株式会社 資生堂